

弾詞 『珍珠塔』 版本研究札記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28186

弾詞『珍珠塔』版本研究札記

黒田 譜美

『珍珠塔』は蘇州弾詞の伝統演目の一つで、本書の蘇州大学図書館蔵の周殊士撰『綉像孝義真跡珍珠塔』24回本は、清代中期から民国期にかけて刊行された『珍珠塔』諸版中、最も流通した通行本である(以下、24回本と略す)。

『珍珠塔』の主な版本研究に、凌景埏「珍珠塔各本異同考」(『珊瑚』第2巻2号原載、蘇州市文化局「評彈研究資料」第一輯、1957年転載)、阿英「馬如飛的『珍珠塔』及其他」(阿英『小説二談』所収、上海古典文学出版社、1958年)、趙景深『彈詞考証』(商務印書館、1938年)等がある。趙景深は凌、阿両氏の研究をふまえて、弾詞『珍珠塔』版本には、主人公の方卿が陳翠娥から珍珠塔を贈られて科挙に受かるまでの中間部の内容に、強盜邱六橋が現れるか否かによって大きく二つの版本系統があると指摘する。邱六橋の現れる24回本の周殊士序に、「贈塔」の後に「劫塔」「追塔」「当塔」「認塔」「哭塔」「造塔」を補い、もとは18回であったのを、24回に増訂したとあり、趙景深はこの増補部分がすなわち邱六橋に関する内容であるとして、この24回本よりも、邱六橋が現れない20回本(俞正峰本)の方が、より古い『珍珠塔』を継承しているのではないかと推定する。

本稿では、これらの先行研究や盛志梅「弾詞知見目録」(『清代弾詞研究』、斎魯書社、2008年)を参照しつつ、近年筆者が中国国家図書館、首都図書館、蘇州図書館、復旦大学図書館等で目撃した24回本以外の版本(56回本、東調本)に関する若干の書誌情報や物語内容を加えて各版本について紹介する。

24回本(周殊士本)

盛氏目録に記載される24回本計30点を刊行年順に並べると以下の通り。※

- 『孝義真跡珍珠塔全傳』6巻、周殊士撰、乾隆46年(1781)刊本(阿)
- 『綉像珍珠塔』24回、周殊士撰、道光13年(1833)無錫方来堂刻本、6冊(華師)
- 『珍珠塔』、道光15年(1835)、無錫三益齋刻本(揚大)
- 『孝義真跡珍珠塔』24回、周殊士撰、道光23年(1843)愛蓮堂藏板、刻本、6冊(国図、芸研)
- 『孝義真跡珍珠塔』24回、周殊士撰、道光27年(1847)恒德堂刻本、6冊(周、上図)
- 『珍珠塔』24回、周殊士撰、道光29年(1849)維揚三槐堂刊本、8冊(揚大、芸研)
- 『珍珠塔』、咸豐元年(1951)刊本、6冊(阿)
- 『珍珠塔』、咸豐8年(1858)寧郡汲古齋刊本、6冊(阿)
- 『秘本新時雅調綉像珍珠塔』24回、周殊士撰、同治6年(1867)、蘇城麟玉山房藏板、6冊(周、阿、北師)
- 『綉像孝義真跡珍珠塔』24回、周殊士撰、同治8年(1869)、無錫方来堂重刻本、6冊(北図、上図、早大)
- 『孝義真跡珍珠塔』24回、同治12年(1873)、抄本(善本)
- 『孝義真跡珍珠塔全傳』24回、周殊士撰、光緒3年(1877)、杭州小西堂刻本、6冊(福師、鄭大、北師、閔、胡、芸研)

『綉像孝義真跡珍珠塔』6巻、光緒8年(1882)周殊士撰、方来堂刊本、6冊(揚大、揚図、鄭大、京大)

『珍珠塔』、光緒13年(1887)無錫方来堂、刊本、6冊(胡)

『綉像孝義真跡珍珠塔』6巻、光緒15年(1889)無錫三益齋刻本、6冊(上図、阿、芸研)

『珍珠塔』、光緒17年(1891)上海書局石印本、4冊(阿)

『綉像珍珠塔全伝』42巻84回、四明顧曲散人校編、光緒18年(1892)上海書局鉛印、8冊(北大)

『秘本九松亭』12巻24回、雲間方元晋原稿、山陰周殊士統並序、光緒18年(1892)上海書局據友樂軒本石印本、4冊(譚、胡、蘇図)

『絵図馬調珍珠塔』24回、長州滄浪釣徒馬如飛吉卿甫著、光緒20年(1894)上海書局石印本、4冊、(周、揚大、上図、譚、阿、早大)

『孝義真跡珍珠縁』4巻24回、後傳30巻、60回、馬如飛撰、光緒22年(1896)上海書局石印本、10冊(上図)

『馬調珍珠塔』、光緒28年(1902)上海書局石印本、4冊(阿)

『珍珠塔』、光緒年間、玉績山房刊本(胡)

『絵図馬如飛彈唱珍珠塔全伝』4巻24回、長州滄浪釣徒馬如飛吉卿甫著、光緒19年(1893)古吳懷周主人序、民国2年(1913)上海文元書局石印、4冊(譚、復旦)

『孝義真跡珍珠縁』4巻24回、馬如飛撰、民国2年(1913)上海廣益書局石印本、4冊(南図)

『絵図孝義真跡珍珠縁』4巻24回、馬如飛撰、民国2年(1913)上海天寶書局石印本、1冊(上図)

『絵図孝義真跡珍珠縁』24回、馬如飛撰、民国2年(1913)上海文益書局石印本、1冊(北師)

『絵図馬如飛彈唱珍珠塔全伝』10巻84回、懷周主人増編、麀閑主人統編、民国2年(1913)上海書局石印本、2冊(国図)

『絵図孝義真跡珍珠縁』24回、馬如飛撰、民国5年(1916)上海徐滄記書局石印本、8冊(上図)

『綉像馬如飛彈唱珍珠塔』6巻24回、申漢煉石書局石印本(呉)

『孝義真蹟珍珠塔』24回、民国28年(1939)上海大文書局排印本(呉)

※盛氏目録に含まれない中国芸術研究院蔵書(芸研)と早稲田大学図書館蔵書(早大)を新たに加え、筆者が実際に目にしたものには所蔵先名に下線を引いて示す。収録先の略称説明は以下の通り。阿…阿英「馬如飛の『珍珠塔』及其他」、胡…胡士瑩『彈詞宝巻書目』上海古典文学出版社、1957年)、関…関徳棟「胡氏編著彈詞目訂補」(『曲芸論集』上海中華書局、1958年)、周…周良『彈詞経眼録』(江蘇文芸出版社、1996年)、善本…『中国古籍善本書目』(上海古籍出版社、1989年)、呉…倉田淳之助『呉語研究書目解説』(『神戸外大論叢』第3巻4号、1951年)。

最古の24回本は、阿英旧蔵の乾隆46年(1781)刊本が知られ、阿英前掲論稿附録「阿英蔵『珍珠塔』版本目」に、「孝義真蹟珍珠塔全伝 24回、乾隆46年原刻 周殊士本 写刻 叙据殊士墨跡刊刻 頁20行 行32字」とあるが、現所蔵先不明である。

それ以降は、道光～光緒期に無錫の方来堂版が四度、三益齋版が二度重版され、道光後期には上海の恒徳堂、揚州の三槐堂、咸豊には寧波の汲古齋、同治以降は蘇州の麟玉山房、光緒には杭州の小西堂等が刊行している。本書の蘇州図書館蔵本は封面が欠落しており、版心にも書肆名が記されないが、その他の版式、図像、字体等が方来堂版に似ており、道光以降に方来堂版を模して刻版されたものかもしれない。

光緒以降は、上海の石印本へと受け継がれて、特に上海書局が継続的に刊行している。光緒 20 年石印本は書名下に「長洲滄海釣徒馬如飛著」として、正文前に「新增馬如飛時調開篇」47 種、さらに毎回首に開篇 1 種ずつを加えるが、光緒 28 年石印本では、開篇 47 種を削り、毎回首にある開篇を残している。これらは書賈が宣伝のために、咸豊・同治に活躍した名人馬如飛の著として開篇を加えたもので、本文の内容は刻本と同じである。また、本邦の井上紅梅(1881-1949)が、第 1～6 回を邦訳したものが『支那風俗』下巻「支那講談」(日本堂書店、1921 年)に載る。各回前に開篇が付くので、底本は光緒 20 年以降の上海石印本であろうと思われる。

24 回本の物語内容については、本書の汪平氏の前言に詳しいのでそちらを参照されたい。他の版本と比較して特筆するべきは、先述のように強盜邱六橋が方卿から珍珠塔を奪い陳府で質に入れる筋があることと、陳府の家僕の名が王本であることである。

20 回本(兪正峰本)

20 回本は凌景埏前掲論稿に紹介されており、北平孔徳図書館旧蔵書と思われるが、現所蔵先不明である。

嘉慶 14 年(1809)吟余閣刊本、首題兪正峰編次、全書 20 回 毎回 2 目、嘉慶元年(1796)玉泉老人跋

回目名は、別母、起程、祝寿、見姑、園会、贈塔、跌雪、偶救、路劫、庭叙、翠病、探信、驚僕、送主、私行、榮帰、羞姑、見娘、説親、塔圓。

登場人物名は、陳連の字が延吉、家僕の名は王本ではなく陳宣、女主人公の名は陳翠蟾となる。

跋に「姑蘇兪正峰、語妙天下、而文筆更活躍。近編『碧玉環』『鴛鴦譜』『鮫綃帕』『珍珠塔』等南詞四本、而珍珠尤其中珠玉也」とあり、「姑蘇兪正峰」から兪正峰は蘇州人と考えられる。

物語内容は、先述のように邱六橋が現れない。積雪の中に倒れた方卿は駅丞姚国棟に救われて畢雲頭のもとへ身を寄せ、下僕の畢琴に珍珠塔を託して河南の母親のもとへ遣わせる。しかし畢琴が途中で遊蕩し、九江の韓太守に珍珠塔を質に渡し、韓夫人がこれを陳府へ返す、という筋になっている。

56 回本(周士珠陸士珍本)

盛氏目録に下記の二点が載る。

『綉像珍珠塔』嘉慶甲戌(1814 年)鴛水主人序、道光二年(1822)蘇州經義堂刻本、首題周士珠陸士珍兩位先生編評、全書 4 卷、毎回 14 目、北平孔徳図書館旧蔵(首図、胡)

『綉像珍珠塔』嘉慶甲戌(1814 年)鴛水主人序、陸士珍撰、飛春閣刻本(北大)

筆者が目撃したのは、国会図書館蔵書と首都図書館蔵書で、両者の版式は酷似するが字体が若干異なり同版では無い。国会図書館蔵書は鄭振鐸旧蔵書で「西諦所蔵彈詞目録」(『小説月報』第 17 卷号外、1927 年)に「珍珠塔、無著者姓名、坊刻本、八冊」と載るものと同一と思われるが、扉、封面、序文、目次は無く、第 3 冊目(第 2 卷前半)も散失している。首都図

書館蔵書も封面が欠損しており刊行元が不明である。

序は以下の通り。「大凡物不得其平則鳴、一有不平而鳴即隨之。如珍珠塔所云：囂凌者如彼、而仗義者如此。真令人感動奮發、興起于好善惡惡、而不能已焉。然彈詞一事、往往有淫液之病、茲書雅馴、其文久為高人所賞識、今又得名家監定、其用意之美、詞調之新、尤足動人視聽者。一旦播之聲歌、自不覺洋洋盈耳、愜意娛心矣。嘉慶甲戌夏日鴛水主人織」

回目名は、賺卿、逼賦、別母、上路、慶寿、見姑、羞卿、園会、贈塔、追松、拷婢、跌雪、救卿、病驛、送礼、路劫、荐方、庭叙、許親、別墳、雪塘、遣琴、覓妓、嫖院、盤琴、遣送、留主、閨病、請医、賺翠、寄主、庵会、亭認、露信、盤僕、安舅、揭參、春試、辱吏、哭親、卜字、祭墓、驛叙、誘僕、究僕、謁宦、考僕、驚方、說親、私行、閨怨、試婿、救翠、見娘、議救、團圓。(下線部は20回本の回目名と重複箇所を示す)

登場人物名は、陳璉の字は天福、号は培庭。家僕は20回本と同じく陳宣。しかし女主人公は陳翠娥で、これは24回本と同じである。

その他の特徴として、24回本が[黄鶯兒][耍孩兒][北曲調][西江月]等の曲牌を多用するのに対して、56回本は第18回に「剪剪花」、第44回に[道情曲]があるのみである。総字数は24回本とほぼ同じ。登場人物の科白(蘇白を含む)を多用する典型的な代言体弾詞だが、24回本が語り手の表白に官白を用いるのに対し、56回本は蘇白を用いる。

物語内容は、20回本と同じく邱六橋が現れない。あらすじは以下の通り。

河南開封府祥符県の方卿は、父は吏部の官にあったが、奸臣に謀られて家が没落し、老母の楊氏と貧乏暮らしをしている。祥符県知府の馮公の取立てに遭い、方卿は母の命を受けて襄陽の叔母を訪ねる。折しも叔父陳璉の五十の誕生祝いをしており、虚栄心の強い叔母方氏に皮肉を言われて、方卿は怒って立ち去る。翠娥は菓子と偽って珍珠塔を方卿に贈り、陳璉も九松亭まで方卿を追いかけて、翠娥との縁組を約束させる。この件で陳璉と楊氏は反目する。方卿は河南の帰り道で雪の中に倒れ、高平駅の駅丞姚国棟に救われる。姚国棟は陳璉に手紙を送り、陳璉は河南へ家僕陳祥を遣わすが、陳祥は道中で悪僧海恵に殺される。方卿は姚国棟の勧めで京都の畢雲頭のもとに身をよせ、畢夫人に畢秀金との縁組を約束させられる。河南の楊氏は息子を探しに襄陽へ行く道中で、九江知府韓嵩忠の夫人に助けられる。方卿は母親を心配して、銀三百と珍珠塔を下僕畢琴に渡して河南へ遣わすが、畢琴は途中で方卿の名を騙って遊蕩して銀三百を使い果たし、韓嵩忠に珍珠塔を質物にして金を借りる。襄陽へ着いた楊氏は陳宣から方卿が立ち去った件を聞いて陳府を離れる。陳翠娥は方卿を案じて病気になるが、陳璉が偽造した方卿の手紙に慰められ、尼寺に身を寄せる楊氏と出会う。方氏は方卿の手紙が偽りであることを知り、陳夫婦は再び反目する。一方、韓嵩忠は水害のため財政難となり獄につながれ、韓夫人に珍珠塔を方卿に返すように託す。方卿は方定の名で科挙に受かり河南へ帰郷するが、母親が居ないので、母親を探しに再度襄陽へ行き、途中で姚と再会して、そこで道童となって流落する畢琴を見つける。方卿は叔母を試そうと道士に扮して陳府へ向かう。韓夫人は方定と方卿は同一人物だと思い、夫の救援を頼もうと陳府へ訪れて珍珠塔を届けるが、方定と方卿は別人だと言われ落胆し、陳宣に楊氏の居る庵へ案内さ

れる。陳府を再訪した方卿は道士に扮して方氏を諷刺した後、陳宣に庵へ案内される。そこへ畢雲頭が妹秀金を陳府に連れてきて、方卿が方定の名で状元に受かったことを知らされる。方卿は庵で母親と再会を果たして、母親と韓夫人を連れて陳府へ戻り、全てが明らかになる。陳璉は韓嵩忠を救援するための資金を集め、姚国棟は京都へ赴き上奏し、韓嵩忠と姚国棟が名誉回復する。方卿は翠娥と秀金と結ばれ、采屏を側室に迎えて大団円となる。

宝賢堂本

阿英旧蔵書で、阿英前掲書によると以下の通り。

『新刻時調珍珠塔伝』8巻、後伝巻4巻、道光20年(1840)上洋宝賢堂写刻、改編簡本、無各巻題無曲、無叙、頁24行×24字(阿、現所蔵地不明)

宝賢堂本の総文字数は24回本の6分の1ほどで、24回本を縮めて改編したものであろうとする。物語冒頭の方卿が城中に入り友人に借金をする際皮肉を言われて帰るくだりがあること、強盗に遇うところで邱六橋の名が示されない点が24回本と異なる。

東調本

宝賢堂本と同様、内容が簡略化されているのが東調本である。盛氏目録は譚正璧、譚尋編著『彈詞叙録』(上海古籍出版社、1981年)にある「『新刻東調珍珠塔』4巻、旧刊本、4冊」のみを引用するが、筆者は以下の三点を確認できた。

『新刻東調珍珠塔』16巻16回、周殊士序、咸豊7年(1857)維揚文碎堂梓本、全4冊、半葉10行×20字(国図)

序は、24回本の周殊士の序文が流用されているが、序文中の数字が「廿四」とあるべきところを本書の回目数に合わせて「拾六」に書き換えている。また目録には下記の16回分の回目名があるが、第1回、第3回、第12回、第15回、第16回、第18回、第21回、第22回と同じである(下線部)。しかし、これらの回目名は本文にはつかず、この序や目録は24回本の影響を受けて、後から付されたものと疑われる。

回目名は、子別母吉凶占卦走長途、方卿見姑爹、姪見姑貧富杭顔抛至戚、花開能有幾時紅誰人保得千年、翠娥請轉方公子、翠娥珠塔為記、陳御入追回九松亭為媒正、方卿宿廟託夢、翠娥想夫服藥、方門楊氏尋子在庵婆媳奇逢、方卿中狀元七省都巡按賜劍、登門窃笑狀元唱小道新腔、陳翠娥白綾自尽、積福堂見母親、親上親出庵聚會、喜中喜同榴和詣珠塔団圓。

また以下の二点は、テキストは同じであるが、巻数は4巻で、各巻名は「見姑娘」「表姐贈塔」「婆媳尼庵相会」「方卿私行」とする。

『新刻東調珍珠塔』、4巻、江西省道生堂、清刻本、1冊、半葉14行×32字(蘇図)

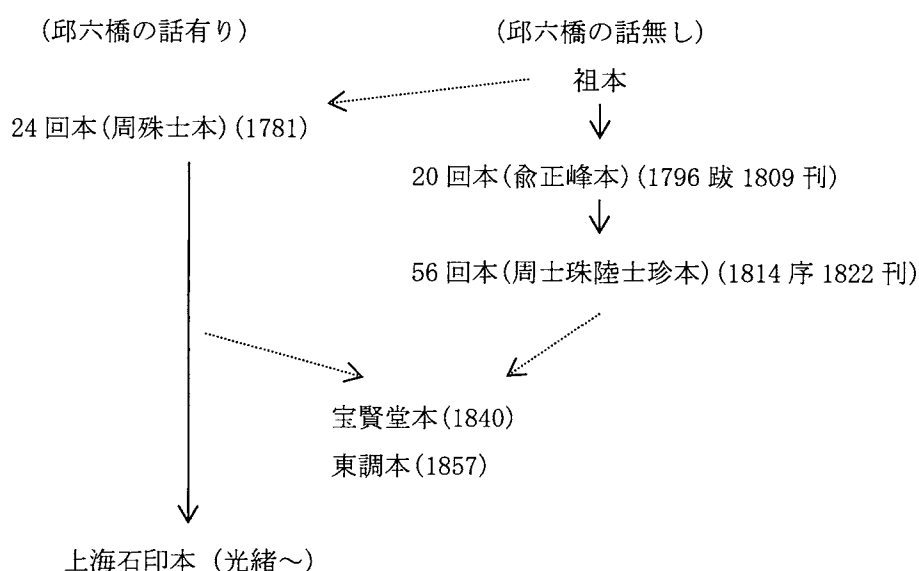
『新刻東調珍珠塔』清刻本、1冊、半葉14行×32字(復旦)

東調本は、登場人物の白を多用する代言体弾詞だが、蘇白はみられない。邱六橋が現れず、陳府の家僕の名前も陳宣であるが、20回本や56回本にある姚国棟や畢琴の筋もない。方卿

は畢雲頭に直接救われ、畢老夫人と秀金を娶るよう縁組を約束する際に珍珠塔を約束の品として渡す。また東調本の冒頭にも、宝賢堂本にあるという方卿が友人に借金を断られるというくだりがある。

以上の各版本の特徴から、弾詞『珍珠塔』の版本分化状況まとめると以下のようになる。

20 回本の刊行地は不明だが、俞正峰が蘇州の人であること、20 回本を継承する 56 回本が蘇州経義堂から刊行されていることから、邱六橋が現れない『珍珠塔』は乾隆以前に蘇州を中心に流布していたと考えられる。一方、乾隆後期には邱六橋の話を含む 24 回本が刊行され、道光前期以降に無錫、上海、揚州、寧波、蘇州、杭州と江浙地域で流通して、光緒以降の上海石印本に継承される。そして道光後期以降には 20 回本・56 回本の影響も受けつつ、24 回本を簡略化した、宝賢堂本や東調本等が現れ、江浙地域以外にも伝播したと考えられる。



[参考文献]

澤田瑞穂「弾詞『珍珠塔』のこと」(『中文研究』第2号、1962年、『中国の庶民文芸』東方書店、1986年転載)

胡士瑩・蕭欣橋『弾詞宝卷書目』(上海古籍出版社、1983年)

黄強校点『珍珠塔』(中州古籍出版社、1987年)

聞炎「《珍珠塔》の矛盾及矛盾の現象」(『評彈芸術』第七集、中国曲艺出版社、1987年)

周良『論蘇州評彈書目』(中国曲艺出版社、1990年)